



Title	美的体験を学ぶ : フローの観点より
Author(s)	野村, 弘平; 赤井, 誠生
Citation	大阪大学大学教育実践センター紀要. 2009, 5, p. 19-24
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6036
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

美的体験を学ぶ

—— フローの観点より ——

野村 弘平・赤井 誠生

Learning Aesthetic Experience: From the Perspective of Flow

Kohei NOMURA and Seiki AKAI

Aesthetic experience is a mysterious feeling that is difficult to describe. Teaching how to gain aesthetic experience is also hard issue and no common theory about it has been established yet. The flow concept presented by Csikszentmihalyi (1975) may bring new light to this field. Flow is a state that occurs to the person who is absorbed in purposeful activity that requires one's full ability and concentration. During flow, one feels good and has a sense as if she/he is being swept along in the experience. This expression describes well what we feel when we have aesthetic experience. Interviews with many museum curators showed that aesthetic experience requires using one's knowledge and ability. The way to a successful appreciation of works of art is a struggle to achieve results and this effort bears flow. Aesthetic experience can be cultivated by teaching knowledge and the point of focus about works of art.

1. はじめに

芸術作品を鑑賞することは、はたして学んで身につけられることであろうか。我々は様々な芸術作品に接し、そのたびに多様な感覚を我が身のうちに感じる。深い感動にひたされ、その作品および作者に畏敬の念を抱くこともあれば、どうにも作品のポイントが掴めず、なぜその作品が高い評価を得ているのかもわからずに、ただ戸惑ったままにそこに立ち、作品を眺めていなければならないこともある。絵画や彫刻から、可笑しみや苦しみ、暖かさや冷たさを感じることもあれば、超然として地上的なものから離れた、一つの完成した世界を感じることもある。非凡な傑作であると感じられる作品もあれば、親しみのもてるささやかな喜びを与えてくれる作品もある。

そしてもちろん、個人差という問題がある。ある作品はある鑑賞者には非常な感動を与え、別のある鑑賞者にはわずかな感動しか与えないであろう。抽象絵画を好んで見る人がいる一方で、写実的な彫刻にこそ真の美が宿ると考える人もいる。一人の鑑賞者の中にさえ嗜好の片寄りといったものがあり、同じ主題、同じ技法で書かれた二枚の絵画が、片方は好ましく、片方はそれほどでも

なく感じられることもあれば、同じ作者の手になる一連の作品の中に、自分の好みと合致するものとせぬものを見出すこともある。

しかしながら、これほどの多様さがあるにも関わらず、美的体験を感じる人々是一个の大きなグループに属すると言ってよいであろう。なぜなら彼らは、美的体験を感じぬ人々のグループと対置せられるからである。好みの差があれど、芸術を愛好する人々は、あちらこちらの美術館を訪れ、様々な作品を前に感動し、あるいは以前見た作品はどうで今回見た作品はこう、といった比較を楽しむものである。芸術を愛好しない人々は美術館など行きはしない。あるいは、テレビや新聞で話題の展覧会に行ってはみたが人込みはひどいし何がいいのかわからない、と溜め息をつくばかりであろう。

この違いはなんなのだろう。ただ生まれもった好みの問題にすべてが帰するのだろうか。どちらかに何かが欠けているのか。芸術を好む人々は成長の過程においてその性質を身につけたのだろうか。そしてより重要なことには、美的体験を感じたいと望みつつもそれが得られぬという人に、美的体験を教えることができるだろうか。

そもそも、美的体験とはどのようなものであるのだろうか。

2. 美的体験とフロー

美的体験とは、押し流されるような体験、エゴを忘れ、鑑賞する対象の中に遊ぶような体験である。もちろん、常にそのような極端なものばかりであるわけではなく、もっとささやかな喜びとしての美的体験の方がはるかに多くあろうが、本質的には、芸術作品の鑑賞は、作品を眺めることによって生ずる感覚に身を委ね、それを楽しむことにある。そのような感覚を表現するものとして、フローという概念がある。

2. 1. フローとは

Csikszentmihalyi (1975) は、人間が楽しみのために行なう様々な行動を調査した。Csikszentmihalyiが調査の対象としたのは、その趣味、あるいは仕事を楽しんで行なっていると自ら認めた人々であり、すなわちロッククライマー、バスケットボールプレイヤー、チェスプレイヤー、作曲家、外科医などの人々であった。数多く行なわれたインタビューの中で、Csikszentmihalyiは、回答者たちが自分たちの楽しみの体験を語るときに使う表現に、共通するものがある事を見出した。それはすなわち、本当に楽しんで何かを行なっている時には、その体験全体が流れるように進んで行くと感じられる、という陳述であった。まったく別種と思われる活動に従事する人々、つまり知的活動を行なう人々と身体的活動を行なう人々が広く共通してこの現象を報告することに気付いたCsikszentmihalyiは、多くの回答者によって繰り返し使用された“流れるような”というその表現から、この感覚／体験をフロー (flow) と名付けた。フロー状態の人間は、自分の行動がなにかば自動的な流れの中にあるように感じ、そしてこのフロー状態は快いものであるとされる。

Csikszentmihalyi (1975, 1988) およびその後の研究 (Jackson & Marsh (1996) など) において、フローという体験はいくつかの特徴によって定義されている。

フローの特徴には以下のようなものがある。(a) それを生じる行動の難度が、行なう者のもつ技術と見合っていないと行なうことができない。難度が技術に比して簡単すぎても、また難しすぎてもフローは生じない。(b) 行為と意識が融合し、自分が何をしているのかはわかっているとしても、自分を客観的に見る自分といったものを意識することはなくなる。(c) 明瞭な目的があり、行為者には自分が何を目標としているのかが常にわかっている。(d) フローが生じるためにはその場でのフィードバックが必要で

ある。すなわち、行為者には自分が上手くやれているのかどうかその場でわかるようであればならない。(e) 目の前にある興味の対象に興味が集中し、周囲の世界は意識にのぼらなくなり、過去の記憶を想起するということもなくなる。周囲の物音や出来事にも気付かなくなる。(f) 自分の行動が、まさに理想的かつ自分の意図した通りに行なわれ、その場の状況を自分が把握した左右しているという感覚が生じる。これに伴い失敗の恐れや不安感は喪失する。(g) 自我が喪失、あるいは忘却される。すなわち、フロー状態の人間は、エゴを保つことや、社会的諸要求を満たすことを考えなくなる。(h) 時間が長く、あるいは短く感じられる。(i) フローを生じる行為はその体験自体を目的として行なわれ、他に目的や報酬を必要としない。

ここに示されたような、何かの行為に集中しその行為が流れるように進み自分の意識と行動が一体化するかのような感覚、すなわちフローは、人が楽しむことを目的として何かの行為を行ない、そして楽しむことに成功した時に生じる現象であり、しかもその行為の種類を問わず一般的に見られるものであるというのがCsikszentmihalyi (1975) の発見であった。フローを生じさせるのは、遊び、趣味、レクリエーションばかりとは限らない。Csikszentmihalyiの調査では、作曲家や外科医といった人々が、その仕事においてフローを体験すると述べている。では、フローを生じさせるのはどのような行為なのであろうか。これについては、Csikszentmihalyiが行なった聞き取り調査では、回答者は一様に、フローを体験するにはそれらの行為が能動的かつ創造的なものであることが重要であると述べている。これに加えて、Csikszentmihalyiはその対象が挑戦的であることが重要であり、またその難度は挑戦者の能力に見合ったものでなければならないとしている。すなわち、対象となる行為が簡単に過ぎるならば、それを行なうことはもはや挑戦とは言えないただの処理すべき作業となってしまう、フローに必要な条件である強い集中がそもそも必要とされないし、また、それが難しすぎるならば、どのようにそれを達成すればよいかがわからず、やはりフローに必要な条件である正しい行ないとそれに伴う支配感を得ることができないからである。

2. 2. フローと美的体験との類似

Csikszentmihalyi & Robinson (1990) は、フロー体験と美的体験との比較を行なっている。彼らは、芸術作品の鑑賞中に生じる感覚とフローとの間には、興味の対象に

意識が集中していること、過去や未来について意識しなくなることで、行為をしている自分というものを忘却すること、その行為の難度に見合う技術を駆使すること、といった共通点があることを指摘している。J・ポール・ゲティ美術館の教育出版部門主任を務めていたBret Wallerは、同書の前書きで、ここにただの類似以上の意味があるのなら、フローの研究は美術館および美術教育に新たな光を吹きこむものであらうと述べている。

3. 美的体験におけるフロー

Csikszentmihalyi & Robinson (1990) は、芸術作品の鑑賞について、それは難度を備え技術を要求する行為であり、美的体験はフローの一種であると位置付けた。そして、美的体験を調べるには知覚、認知の方面からのアプローチよりも主観的な体験の分析が重要であり、知覚、認知的作用の解明は主観的な体験の解釈がなされて初めて意味を持つとし、主観的な美的体験について調査するための広範なインタビューを行なった。

美的体験を調べるための調査対象としては、美術館の学芸員などの専門家を調べるのが適切であると考えられた。それらの人々は美術的な感覚を備えているだけでなく、自分の感じる美術的な体験について意識的な自覚を持っているからである。一方で、作品を作る芸術家たち自身を調べることに問題があると考えられた。なぜなら、芸術家は作り手としての観点から他者の作品をも眺めるであろうから、それは一般的な観客とは異なった美的体験である可能性があるからである。また、インタビューにおいては、質問者の先入観が入り込むことを避けるためには、あらかじめ用意された質問に答えてもらうよりも、美術的体験について自由に語ってもらうことがふさわしいと考えられた。

3. 1. 学ぶものとしての芸術鑑賞

「見ることができるのは、見るように教えられたものだけです。持続的かつ創造的に“見る”ためには、何を見るべきかについて前もって学んでおかねばなりません。(Csikszentmihalyi & Robinson, 1990, p.42)」との言葉に代表されるように、インタビューの結果からは、多くの学芸員たちが、芸術鑑賞は技術的な作業であり、それは学んで身につけるものであると考えていることが明らかになった。学ばなければならない内容は広範にわたる。その作品の歴史的な位置付けが重要であると考えられる者もいれば、画法や技術について知ることが重要であると考

える者もいた。もう一つ重要なのは、作品自体に込められた作者の意図であって、作者にその作品を作らせた使命感や決断を知ることによって、作品の魅力が増すと述べる者もいた。

「最も大事なことは、作者が伝えたかったことを知ることです。人間の感性には個人差があり、(……)我々は美術的感覚を共有できません。フェルメールが伝えたかったことを知ることが重要なのです。(……)それゆえに、作品が書かれた歴史的背景や、なぜその画材が使われたのかなど、あらゆることを知ろうとしなければなりません。(Csikszentmihalyi & Robinson, 1990, p.57)」との言明は多くの示唆を含んでいる。もしも、芸術作品の解釈において、ある程度一般的に通用する正しい解釈というものを求めるならば——そしてそれは、美的体験を他者に伝えようとする場合、特に教育現場においては絶対に必要となるものだが——個人の独自の感性というものはむしろ時として妨げになる。本質的に多様なものであるべき美的体験において、指標となるものがあるとすれば、それはその作品が本来目指そうとした、作者自身の意図であらう。それは、その作品に対する詳細な知識の収集によって、はじめて明らかなものとなるのである。

このような、知識と技術を駆使する芸術鑑賞には、それなりの時間を要し、また環境も重要となる。ある学芸員は、一つの絵を最低限理解するには少なくとも45分は必要であると述べ、別の学芸員は、理想的には、一つの部屋の中にその作品と自分だけがあり、他には何もないという状況が芸術鑑賞には最もふさわしいと述べた。「それは個人的な、静かな体験です。混み合った部屋では決してそれは生じません。(Csikszentmihalyi & Robinson, 1990, p.144)」

3. 2. 作品との相互作用

芸術作品の鑑賞は決して一方通行的なものではない。鑑賞者と作品との間には、相互作用のようなものを感じられると、多くの学芸員が述べている。(Csikszentmihalyi & Robinson, 1990, p.62)

「私の体験からすれば、それは、作品があっちにあって、自分がこっちに座っているということじゃないんです。(Csikszentmihalyi & Robinson, 1990, p.62)」 「それは向こうから一方的にやってくるんじゃない。対話なんです。(ibid.)」 このように述べた学芸員らによれば、彼らは作品から何かを受けとるだけでなく、作品に何かを与えるのだという。作品を眺め、何事かの解釈を行なう。するとその解釈によって、作品には新しい意味が付

与され、新たな目でその作品を見つめなおすことができる。そうすると、先程までは見えなかった新たな解釈が生まれ、またその解釈によって、という風に、芸術鑑賞は段階を追って深められていくことになる。

作品に込められた作者の意図を読み取ることもまた、作品との相互作用の一つの目的である。時には、作品を理解することと作者を理解することは不可分なものであり、作者がその作品を作るに至った生活史に魅力を感じる者の中にはより一歩踏み込むものもある。「作品が語りかけてくる作者の物語に惹きつけられます。(そのような背景がない作品については)自分で物語を考えます(笑い)。作者の生活を想像し、なぜこのテーマで作品を作る気になったんだろう、とかね。(Csikszentmihalyi & Robinson, 1990, pp59-60)」

芸術作品を鑑賞するとは、その作品から何事かを読み取ることである。作品が何事かを訴えてくるならばそれを読み取り、訴えてこない作品からは読み取らない、というものではなく、作品を鑑賞するためには、必ず何かを読み取らねばならないのである。Csikszentmihalyi & Robinson (1990) は、フローとしての美的体験において、フローを生じるための難度はすなわち作品との対話の難度であるとした。作品との対話が困難であるとき、それは挑戦的であるがゆえに重要なものとなり、それが達成された場合には鑑賞者にフローをもたらす。また、作品が解釈され、その解釈によって新たな意味を読み取ることができ、それによって新たな解釈が生まれるというサイクルは、やはりフローに必要とされるフィードバックを鑑賞者にもたらす。多くのインタビューから見出された、美的体験を生み出す作品は、鑑賞者が読み取るべき多くの複雑な情報を秘めていなければならないという事実が、これらの説を裏付けている。

3.3. テレビの視聴は美的体験か

何かの対象を好んで鑑賞し、そしてそれによって我を忘れているときでも、それが必ずしもフローではなく、従って美的体験ではないという場合はあるだろうか。

Perry (1999) は、テレビを見ることおよびギャンブルにおける体験について、それらには挑戦もなければ技術の使用もなく、フローとはいえない、我を忘れるだけではフローとは言えないのは、眠ることがフローではないのと同様だ、としている。ギャンブルについてはここでは措くとして、テレビの視聴について見てみたい。

Massimini & Carli (1988) の調査によれば、テレビを見ながらフローを感じたという報告は、テレビを見てい

た場合に関するすべての報告の中の2.8%にすぎなかった。一方で、芸術活動およびホビーに従事しながらフローを感じたという報告は、同じく芸術活動およびホビーに関するすべての報告の中の47.2%を占めた。

ここから、テレビを見ることはフローではないと言えることは簡単である。しかし、テレビの視聴は非常に多くの人が好んで自ら選んでいる行為であり、それが視聴者になんらかの喜びをもたらしていることは明らかである。

Kubey & Csikszentmihalyi (1990) は、テレビの視聴がもたらす喜びについて、フローの観点から検討を加えた。まず、フローをもたらす行動は、行為者によって能動的に行なわれねばならないが、テレビを見るのが果たして能動的に行なわれていると言えるかどうかは不明瞭である。調査によれば、テレビを見ることを受動的でありほんやりした活動であると答える人が多い一方で、テレビを見ることを能動的であると答える人も一定数いたからである。しかしこれは、言葉の解釈によるところが多いと言える。Kubey & Csikszentmihalyiは考えた。見る番組を選んで見ているから能動的と答える人もいれば、どれほど熱心にテレビを見るかで判断する人もいたようであった。

しかし、フローが備えるべき他の条件においては、テレビの視聴がそれを備えていないことは明らかとなった。対象に集中しているか、挑戦的な要素があるか、能力を活用しているか、のすべてにおいて、テレビを見ている間についての回答は、他の活動の平均に比べてはるかに低かった。とくに挑戦的な要素と能力の活用においては、テレビを見ることはすべての活動の中で最下位であった。また、活動的であると感じるか、状況を支配していると感じるかという質問についても、テレビの視聴中には否定的な回答が非常に多かった。

ならば、テレビの視聴にはどのような喜びがあるのだろうか。ひとつの答えは、テレビを見ることによってリラックスできるというものである。これについては、読書が、リラックスする効果についてテレビを見ることと共に高いポイントであったが、読書は、対象に集中しているかという問いについてもテレビよりもかなり高いポイントであった。これは、娯楽においては、リラックスするために集中を解く必要はなく、集中したままでリラックスできることを示していて興味深い。これらをまとめて、Kubey & Csikszentmihalyi (1990) は、人々がテレビを見ることの理由は、しばしば、まさに、注意や集中を必要としない経験を求めていることによると結論づけ

ている。

5. まとめ

4. 創造的活動におけるフロー

フローは、芸術の受容としての美的体験にのみ現れるわけではない。創造的活動においても、フローは重要な役割を果たす。

Larson (1988) は、精神が統一されて環境と適応している状態は、人間がもっとも効果的に活動できる状態であり、すなわちフロー状態の人間は、彼にとって最高の成果を上げられる、という仮説の下に、学生が課題として与えられたエッセイを書く際にフローを体験したかどうかと、書き上がったエッセイの出来具合との関係を調べた。その結果、フローを体験しつつ書かれたエッセイは果たして明らかに出来がよかった。そればかりではなく、学生がエッセイのために与えられたテーマに興味を持っていたかどうかよりも、学生がフローを体験していたかどうかの方が、より強く成果に影響したのである。実際、テーマに興味を持っているというだけでは、文章を書く過程で不安や退屈の状態に陥らないために十分ではないことが明らかになった。そればかりか、調査された生徒たちの何人かは、対象に強すぎる興味を抱いていたために、過剰な興奮によって、自分が書いているものに対するコントロールを失っていた。一方で、フローを体験しつつエッセイを書いた学生たちのうち、当初はテーマに興味がなかった者たちは、書き進むにつれてそのテーマを面白く感じるようになったと報告したのである。Larsonは、成功する書き方とは、自分と自分が書いているものとの間に適切な関係を築くことであるとし、行為に楽しみを見出す能力が、創造的で能率的に文章を書くことにつながっていると結論した。

また、多くの小説家を対象に、執筆中のフロー状態についての広範な聴き取り調査を行なったPerry (1999) は、インタビューされたほとんどすべての小説家が、フロー状態で書くときにこそ良いものが書ける、あるいは、フロー状態にならないと書けないと述べたと報告している。また彼女は、ナチュラル・ライターと彼女が名付ける人々について触れている。それらの人々にとっては、フローは通常の状態であり、彼らは日常生活においても可能な限り常にフロー状態で過ごしているという。彼女は、これらの人々は経験に対して開かれた態度をもっており、身の回りの出来事に対して常に興味を抱き、開放的で偏見のない人生を送っていると述べている。

Csikszentmihalyi & Robinson (1990) によれば、一般に考えられているのとは異なり、芸術鑑賞の専門家たちは、自分の能力を駆使することは芸術鑑賞の一部であって切り離せないと考えているようだ。他のフローを生ずる体験と同様、美術鑑賞もまた達成すべきゴールを持ち、それに辿りつくためにおのれの能力を駆使しなければならない。この場合の能力とは、知識、経験、美的感性などである。一方で、美的体験に馴染みをもたない多くの人々は、芸術作品を目の前にしても、どうしていいかわからないようだ。彼らにとって、そこには達成すべき目的も解決すべき問題もない。それゆえ彼らは作品に対してどう反応していいかわからないのだ。

すなわち、美的体験を学ぶことは可能であると言えることができる。美的体験を感じる者と感じない者との間にある差異は、専ら知識量の違いであると考えられるからである。ただこれについて見よ、あれについて見よ、と指示をするだけでも、見るべき点を知らなかった者にとっては、美的体験の非常な躍進をもたらす可能性がある。達成すべき目標を与えられ、それをクリアしていくことによって、フローを生じることができるようになるからである。

ただし、知識量及びフローという観点だけでは説明できない点があることは認めなければならないだろう。

Bret Wallerは、Csikszentmihalyi & Robinson (1990) の前書きで、スキーの上級者が備えている技術は観察できる行動のなかに現れるが、芸術鑑賞はそうではない、スキーの初級者は転ぶが、芸術鑑賞の初級者は外面上は他の鑑賞者と区別がつかない、彼が鑑賞に成功しているか失敗しているかは外からは隠されている、ということを述べている。この例えは、敷衍してみると興味深い。スキーの初心者には、転びながらも楽しいであろうが、芸術鑑賞の初心者には、失敗しながらも楽しいであろうか。スキーの初心者には、上級者を眺めて目標とすることができると、芸術鑑賞の初心者についてこの点はどうであろうか。そもそも、芸術鑑賞の初心者には、自分が鑑賞に失敗していることを自覚できるだろうか。

Massimini & Carli (1988) は、フローの条件とされる難度と技術の見合っていることについて、特に、難度が低く、かつ技術も低い場合にはフローが生じていないように見受けられることに注目して、ただ難度と技術が見合っているだけではフローを生じるには不十分であることを指摘し、一定以上の技術が要求される場合にはじめ

てフローが生じることを示した。ならば、誰しも最初は初心者であるからには、最初の芸術鑑賞は必ず失敗することになってしまう。人は如何にしてそれを乗り越え、芸術の愛好者となるのだろうか。

しかしCsikszentmihalyi & Robinson (1990) によれば、作品に関する歴史的知識は、作品を最初に見たときの感動には影響しないが、作品を鑑賞する体験を重層的かつ永続的にする、ということのようである。ならば、少なくとも作品を最初に見るときの喜びを味わうには技術はいらないということになり、作品をただ眺めるだけで得られる喜び、知識がなくとも得られるような喜びが、芸術鑑賞にはあるということになる。その喜びは、あるいはフローでさえないかもしれない。それは受け身のものであるはずだからだ。作品を味わっている以上は、それは能動的に解釈しているのだと言うこともできるが、「そもそも、受動的な解釈などというものがあるだろうか。Kubey & Csikszentmihalyi (1990)」という疑問は、能動的な解釈という考え方の問題点を鋭く突いている。

作品を最初に見たときの喜び、それがあのかないかが、芸術の愛好者とそうでない者を分けるのかもしれない。「それは誰でも生まれつき持っているものです。学ばないといけないようなものではありません。(Csikszentmihalyi & Robinson, 1990, p.155)」 「それはある種の人々が生まれつき持っているものだ。もちろん、様々なことを学び、それを鍛えることができるが、核となるものが要だ。動機づけや教育だけでなく、個性というものが問題となる。(ibid.)」 という学芸員の言明は、学ぶことができず、後天的に身につけることもできない特質が、芸術鑑賞に必要な要素として存在する可能性を示しているのかもしれない。

そして、「それは同じ感動を他の人と共有する喜びであり、かつそれを他の人と共有していることを自覚して

いる喜びでもあるんです。(Csikszentmihalyi & Robinson, 1990, p.132)」と述べた学芸員もいた。そこには、芸術作品が、時に美的体験以上の意味をも内包することが示唆されているのではないだろうか。

文献

- Csikszentmihalyi, M. (1975). *Beyond boredom and anxiety*. Jossey-Bass Inc Pub. 今村 浩明 訳 1991 楽しむということ 思索社
- Csikszentmihalyi, M. (1988). The flow experience and its significance for human psychology. *Optimal experience: Psychological studies of flow in consciousness*. New York: Cambridge University Press. 15-35
- Csikszentmihalyi, M. & Robinson, R. E. (1990). *The Art of Seeing: An interpretation of the aesthetic encounter*. Getty Publications.
- Jackson, S. A. & Marsh, H. (1996). Development and validation of a scale to measure optimal experience: The Flow state scale. *Journal of Sport & Exercise Psychology*, 18, 17-35
- Kubey, R. & Csikszentmihalyi, M. (1990). *Television and the quality of life: How viewing shapes everyday experience*. Lawrence Erlbaum Associates, Inc.
- Larson, R. (1988). Flow and writing. *Optimal experience: Psychological studies of flow in consciousness*. New York: Cambridge University Press. 150-171
- Massimini, F. & Carli, M. (1988). The systematic assessment of flow in daily experience. *Optimal experience: Psychological studies of flow in consciousness*. New York: Cambridge University Press. 266-287
- Perry, S. K. (1999). *Writing in flow: keys to enhanced creativity*. Writer's Digest Books.

(のむら こうへい 人間科学研究科・

博士後期課程3年)

(あかい せいき 大学教育実践センター・教授)